

今回は、私たち人間に最も近縁な動物で、困った点から注目されるようになった神奈川のニホンザルについて紹介しましょう。

ニホンザルはオナガザル科マカカ属のサルで、日本列島にのみ生息する固有種です。中型で褐色の毛色をしたどちらかという目立たないサルですが、成熟すると顔とお尻が真っ赤になります。雑木林や照葉樹林を主な生活の場として、樹上の果実や葉、下生えの草や昆虫などを食べて生活しています。一日の大半の時間は、遊動しながらの採食にあてられます。かつては、日本全土に広く分布していたと考えられますが、この数10年のうちに、少なくとも10個体群が絶滅し、6個体群は完全に孤立するようになりました。

個体群とは、群れがそれぞれの遊動する地域を重ね合わせていくつか集まってできるグループのことで、この個体群の内部で遺伝子の交流が行われます。個体群という単位は、野生動物の保護管理を考える場合に特に大切です。ニホンザルの群れが1つだけ残っていても、厳密には野生の群れとはいえません。外との遺伝子の交流がなければ、近親婚をくり返した果てに繁殖率の低下を招き存続できないからです。個体群の大きさがどうなっているか、将来に向けても適正なサイズのまま維持されるか否かが、動物の存続を決める最も重要な基準となります。

神奈川では、丹沢と箱根という2つの山岳地帯にそれぞれ独立の個体群がいて、東京都の奥多摩地方の南秋川個体群

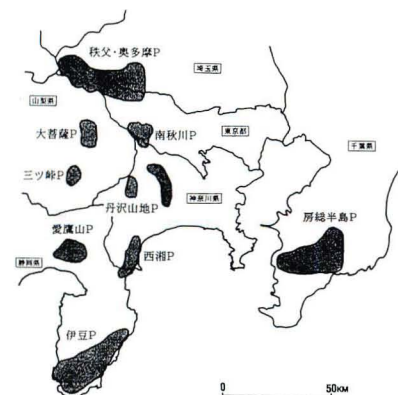


図1. 南関東地域におけるニホンザル地域個体群の分布(南関東ニホンザル調査・連絡会、1995)。

の一部となる藤野町の群れを加えると、3つの個体群が生息していることとなります。血液のタンパク質の組成を比べると、3つの個体群はそれぞれに別のルーツを持ち、西湘個体群は伊豆個体群と南秋川個体群は山梨や埼玉の個体群と、それぞれにつながりが深く、丹沢山地個体群は東京湾をへだてて100km近くも離れている房総半島個体群とのつながりが深いことがわかりました(図1)。

### 神奈川のニホンザル個体群の将来診断

3個体群をめぐる状況はさまざまです。個体群のサイズ、頭数が増えているか、個体群が占める地域の広さ、人との間にトラブルが生じているか否か、捕獲や生息環境の破壊などのプレッシャーがかかっているかなどの点をチェックしながら神奈川の3個体群の存続可能性を診断してみましょう。

南関東地域の他の個体群の診断結果ともあわせて評価した結果、8個体群中唯一西湘個体群だけが「すでに絶滅したか、絶滅の危機にある個体群」となりました(表1)。サルの頭数が年々減少しつつあり、この数年で数が回復する兆候が認められない、サルによる被害は回数も増え内容も悪化する一方で、今後捕獲・射殺等が増えていく可能性が高い、などの点で、「絶滅」という予測が出されたわけです。

### 西湘のニホンザル個体群と博物館

博物館の地元である西湘のニホンザル個体群は、古くから箱根のサルとして有名でした。1960年代から1970年代にかけては、湯河原町と箱根町に餌場が設けられて多くの観光客を集めました。餌づけ以前には2群で50頭前後でしたが、餌づけによって数が増え、群れが一時は7つにまで分かれました。その後餌づけが中止され、サルたちは食べ物を求めて、人



図2. 人家近くに出没するニホンザル(撮影:佐渡友陽一)。

里の周辺まで広がっていくようになりました。ただでさえ知恵のあるニホンザルが、餌づけによって人間を恐れなくなっていたので、猿害が生じるのは当然の帰結でした。

この博物館のちょうど北側にあたる地域は、S群が集中的に利用する地域です。S群は箱根町東部、小田原市の西部からその北の南足柄市に及ぶ範囲に生息する30数頭の群れで、箱根の旅館街や住宅地にも頻繁に出没します(図2)。秋から冬にかけて、このS群は博物館の真向かいにあたる直線距離にして4kmの地域を行ったり来たりしながら過ごします。S群の数個体につけられた発振器の信号をキャッチするため、昨年博物館の屋上にアンテナをたてました。群れのいる方向が特定できて、遊動のパターンを把握することができるようになりました。これをもとに、博物館でより新しい情報を提供したり、保護管理プランを作成するための基礎データとして蓄積したりするなど、いろいろな活用方法を検討中です。

### 西湘個体群の将来

多くの野生動物と同様に、西湘個体群の行方は私たちの手にゆだねられています。長期化した被害への抜本的な対策として、平成元年より野猿の郷整備事業が行われています。これは、現在の生息

域の山側付近にニホンザルが自然の食物を食べて生活できるような郷をつくり、そこに西湘の個体群を移そうという計画です。植林のむずかしさやニホンザルを郷にとどまらせる決め手不足など問題も多く、実現までの道のりは険しそうです。

表1 神奈川の3地域個体群の現状と将来診断(南関東ニホンザル調査・連絡会1995を改変)

地域個体群	群れタイプ	個体群の大きさ	被害	捕獲・環境破壊	総合評価
丹沢山地	非餌づけ群	分布域の大きな変化はなく、個体数の大幅な増減もない。	一部被害のない群れもある。サルの作物への依存度は西湘より低い。	顕著	放置すれば、数年から10数年以内に絶滅危機
西湘	餌づけ群・元餌づけ群	餌づけ中止後、減少を続ける。回復の兆候なし。	農業被害・生活被害ともに大きい	深刻である	絶滅/絶滅危機
南秋川	非餌づけ群	昭和20~30年代に減少したが現在は回復した。	一部被害のない群れもある。サルの作物への依存度は西湘より低い。	顕著	放置すれば、数年から10数年以内に絶滅危機

表1. 神奈川の3地域個体群の現状と将来診断。